立ち上る事も出來ない、最初足をすくはれたのだ。
頭と言はず、脊中と言はず、グワン〳〵と打ち擲られた。
『此の野郎、大きな事ヌカシやがつて』
先の自動車の連中もやつて來て俺を擲る。
俺は觀念の齒を食ひ締めてゐた。
ヒリ〳〵顫へて、芋虫のやうにへたばつて了つたのだ。
俺は完全に氣絶したか何うかは知らない。
後ろ手にしばられた手は氷の如く痺れて、感覺はなくなつてゐた。
自動車を幾度も〳〵止めて、腕に注射をされたり、變な包ひを嗅がせられたやうに俺は思ふ。
俺の頭は獨りでに地べたにへひつく張るやうに下る。
俺は停車場で觀音經を唸つた。
目の前に白い幕が垂れ下つた。
それでも汽車に積み込まれて、二時間ばかり搖られて品川驛に着いて、降りた時の事を俺は覺